

本日、吉村訂演

6日3時~6時 理学部旧館3階中央会議室

『大学問題と
労働問題』に

結集せよ！

来聴観迎！

理院協王催

現代日本をめぐる政治経済状況
と大学斗争のもつ意味

我々は、今、大学斗争の最大困難な局面にきている。 井功蔵常

監下において大学当局側が強圧的な態度に出ていることは十二分に
至極したが、物理三回生に対する一月四日の教授連のあの管理者的打
動には驚いた。 まさに権力にあやつられた人形の姿を見た。 大

学は末期的症狀である。 大学の教員は自らのなした行動の意味を知
るべきである。 九六の米軍ジェット機墜落事件から、基地問題、中
保問題へと進展したように、激動の社会体制の中に大学は存在している。

大学法もその大きな、社会と大学との要のものとして把握される。

大学の主体性を剝奪する形で政府から文部省から、統制がくる。 彼ら
は大学の徹底刷新を目ざしている。 これは単に彼らの教育的配慮から
なされるのでは決していない。 彼らは彼らの必然性に基づいて行動する。

現実社会の資本主義経済の構造と、それに即した企業からの要請により
必要な科学技術政策、大学政策が決定せられ、それらが全て大学に押し
かぶってくるのである。

（二）した中で、大学斗争は当然政治性を帯び、それゆきには斗いえな
くなってしまった。

一方、日佐藤訪米をめぐる、沖縄・中保問題は政府の新しい形の
政策転換（極東における、日本の経済的軍事的役割の米国の肩代り
化をはかり、独占の市場の新展開の方向性）の一里塚として、どうあら
れる。 一月以降の政治の季節に、我々の意図を自己内で整理し、論

理化することが必要である。 我々の行手は現迷であるかもしれない。

しかし、大学斗争で又つかり、停滞した今、我々は勝利への斗いを組む
ためには、大学斗争のもつ意味をもつ一度とらえ直し、現代の社会状況
の中に位置づけなければならぬ。 我々の意図が大学問題で問われる

ならば、発展性は約束されるにあらう。

五月、パリにおいては、大学斗争が労働戦線の高揚をひき起こしたが、
日本においては、大学斗争は全く冷え上った状態である。 それがい
こまで困難な局面に立たされたことの理由だろう。 学生と労働者と

の相違は何か。 労働者と学生との共闘の意味は何か。 大学斗争
のもつ意味をもつ一度とらえ直そう。

本日の吉村講演、討論会に参加

しよう！

▽理院協▽